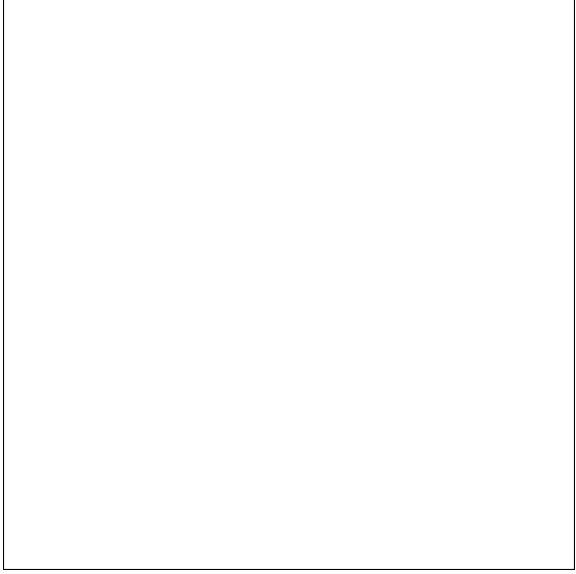




(utan bilder)

✎ Lindiwe Matshikiza
🔊 Meghan Judge
📄 Yuka Makari
💬 japanska
📊 nivå 3



口/\0子



Sagor för barn på svenska

berattelser.se

口/\0子

Skriven av: Lindiwe Matshikiza
Illustrerad av: Meghan Judge
Översatt av: Yuka Makari

Denna saga kommer från African Storybook (africanstorybook.org) och vidarebefordras av Sagor för barn på svenska (<https://berattelser.se/>), som erbjuder sagor på många språk som talas i Sverige.

Detta verk är licensierat under en Creative Commons

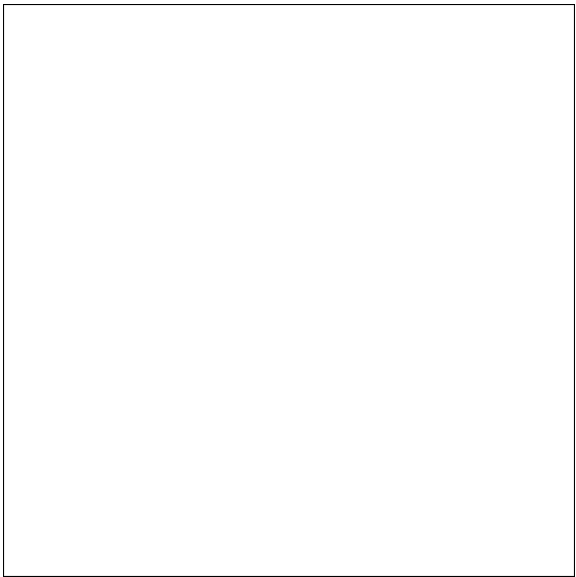
[Erkännande 4.0 Internasjonal Lisens.](https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.sv)

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.sv>



ある日のことです。小さい女の子が遠くのほうに不思議な形をしたものをみつけました。

その形が近づいてきたとき、女の子は大きなお腹をした妊婦さんだと気が付きました。



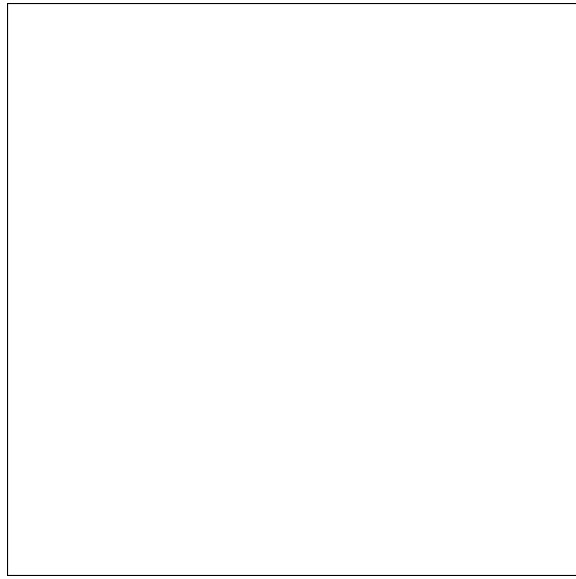


その女の子は恥ずかしがりやでしたが、勇気を出して妊婦さんに近づきました。女の子や女の子の家族たちは、その妊婦さんをしっかり守ることに決めました。

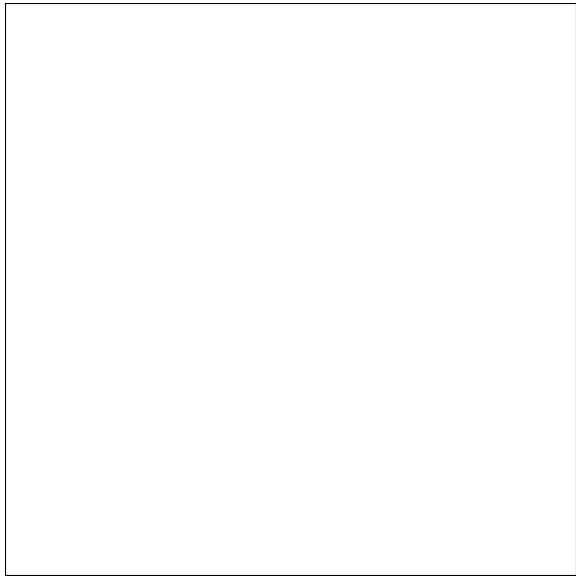


ロバと彼のお母さんは一緒に成長し、暮らしていく方法をたくさん見つけていきました。ゆっくりではあるけれど、周りの家族も徐々に彼らのことを受け入れていきました。

ロバは、息子を失って悲しみにくれていたお母さんを見つけることができました。彼らはお互いに長く見つめあい、そして強く強く喜び、抱きしめあいました。



赤ちゃんは今にも生まれそうです。みんなが彼女を助けました。「押すんだ!」「毛布をもってきて!」「水をちようだい!」「押し」
て——い!!」



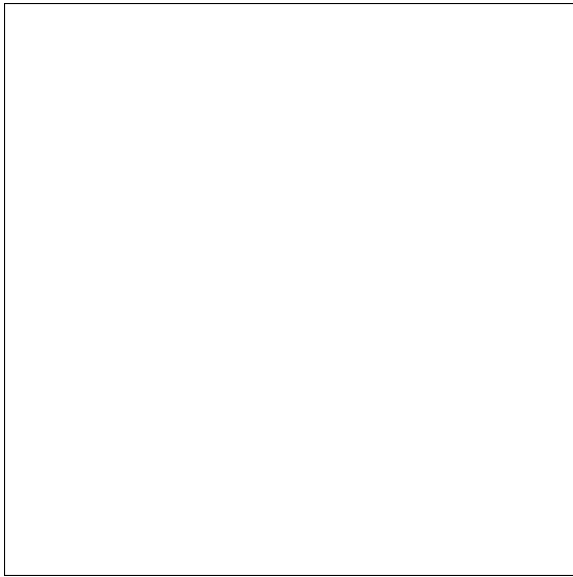


しかし、赤ちゃんが出てきたとき、彼らは驚き飛び跳ねました。「ロバ?！」

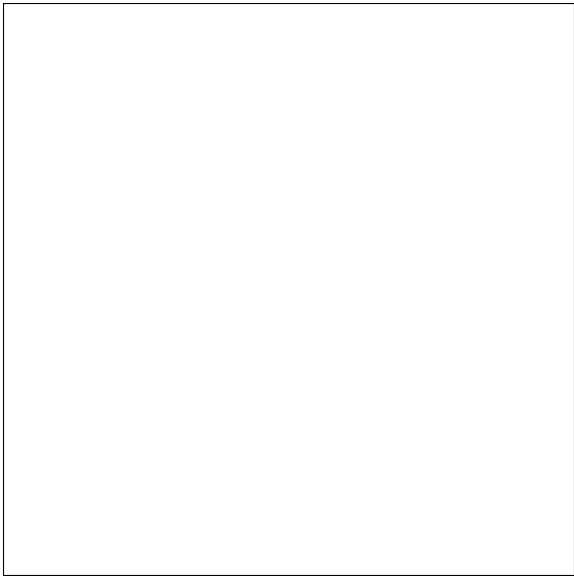


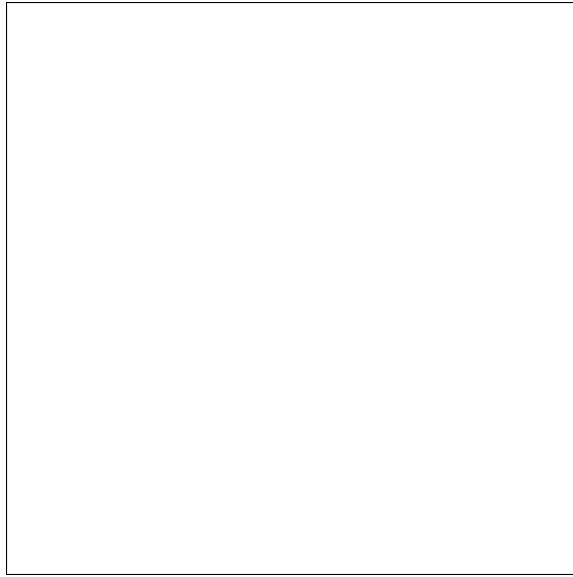
ロバはついに自分がどうするべきかがわかりました。

ロバが起きたときには、雲も、親愛なるおじ
いさんも消えてなくなっていました。

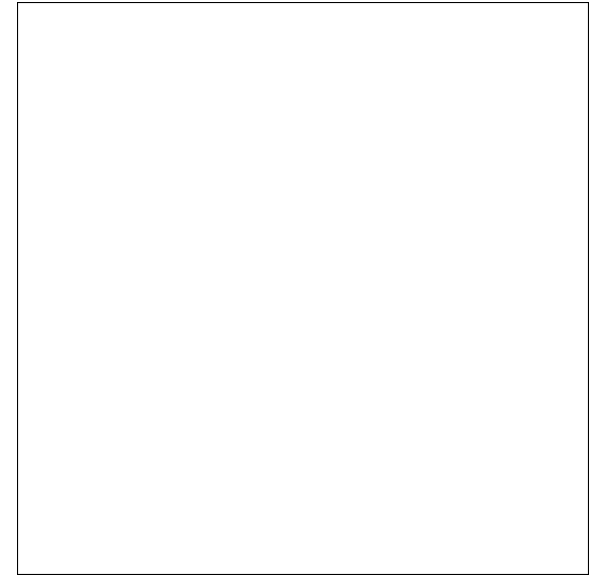


みんなは「私たちは彼女のことも赤ちゃんも
守ろうと決めて手助けをしたけど、彼らは私
たちに悪い運をもつてくるに違いない」と言
い始めました。



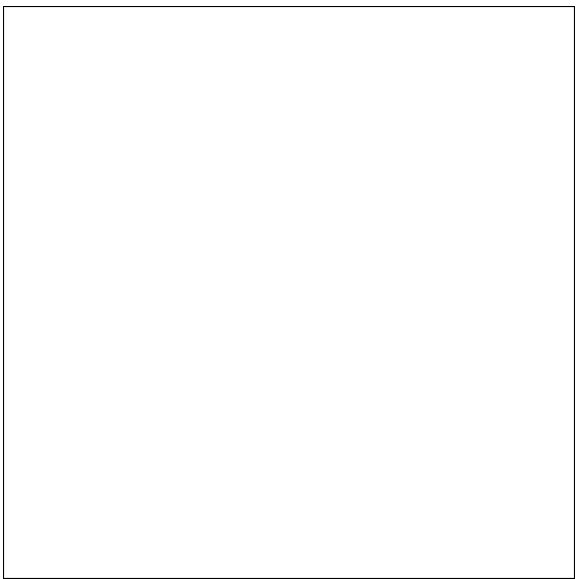


彼女はまた一人ぼっちになってしまいました。彼女はこのかわいそうな赤ちゃんをどうやって育てればいいのか、自分はどうすべきか、わかりませんでした。

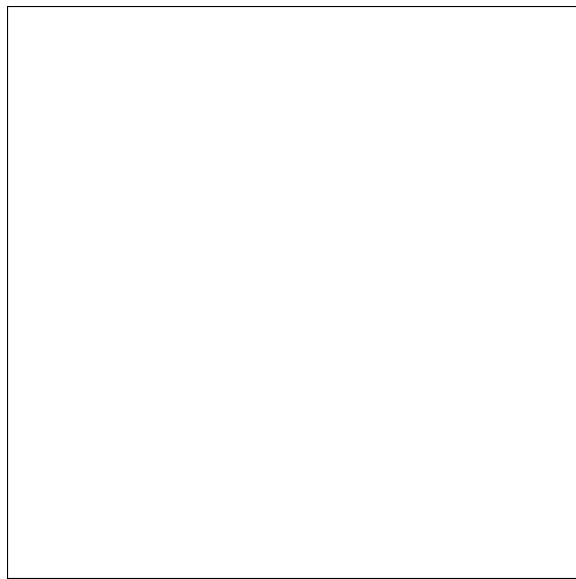


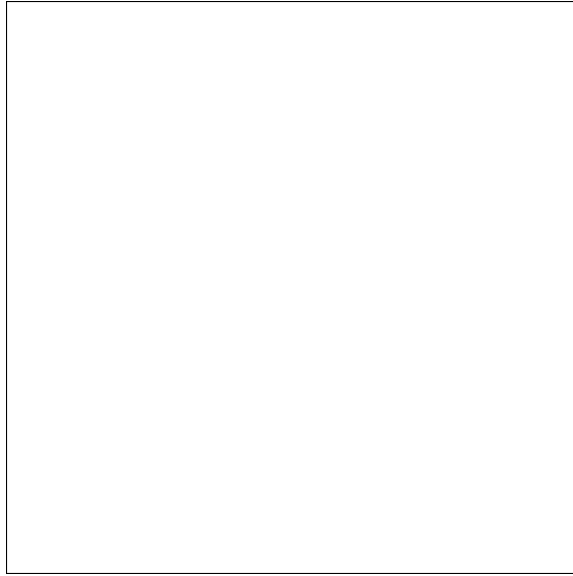
彼らは雲の上で眠りに落ち、ロバはお母さんが病気になり、自分のことを呼んでいる夢をみました。

しかし、彼女は、ロバが自分の子どもであり、自分はロバの母親であることを受け入れなければなりません。

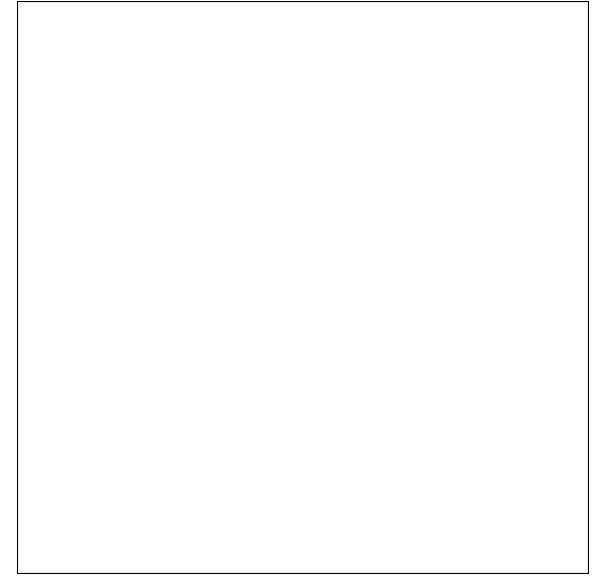


ある朝、おじいさんはロバにのり、山のついでに、おじいさんをお願いしました。

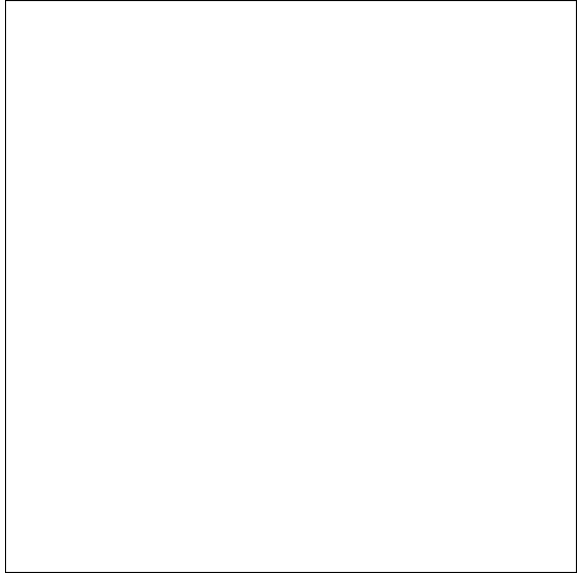




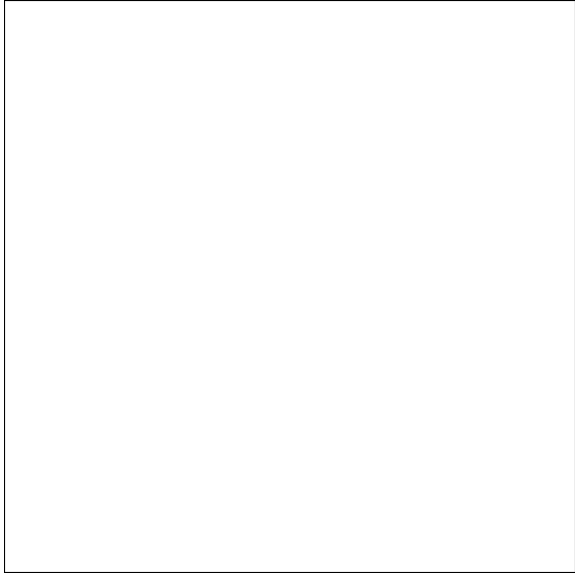
その子どもが小さいサイズのままであれば、すべては違っていたでしょう。しかし、そのうちにその子どもは彼女がおんぶできないくらい大きくなってしまったのです。そしてその子はどんなにがんばっても人間と同じ行動ができるようにはなりませんでした。母親は疲れ、イライラして、自分の子どもを動物に接するように扱いました。



おじいさんは口バに生き抜くためのたくさんの方を教えてくださいました。彼はその教えをよく聞き、学びました。彼らはお互いに助け合い、笑いあって時を過ごしたのです。



その怒りやアトシ又はロボの中にとんどんた
まっついていきました。ロボは人間と同じことは
できないし、人間のようにはなれない。たま
りにたまった怒りから、ついにロボはお母さ
んを蹴ってしまいました。



ロボが起きたとき、そこには知らないおじい
さんがロボをじっと見つめて立っています
た。すると、おじいさんの瞳の中に小さな希
望の光をみつけたのです。



ロバは自分のしたことに対し恥ずかしい気持ちでいっぱいになり、精一杯の速さでその場から走り去ってしまいました。



気がつくあたりはすっかり夜になり、ロバは道に迷ってしまいました。「ヒヒーン……」彼は暗闇のなかささやきました。「ヒヒーン……」それは後ろにこだましただけでした。彼はひとりぼっちでまるくなり、深い、悲しいねむりにつきました。